

NeoCon2019 にみるオフィス家具の提案に関する報告

オフィス家具研究部会

A report on proposal of office furniture seen at NeoCon 2019 Office Furniture Research group

那波 伸晃 (オフィスコム株式会社)、溝口寛二 (プラス株式会社)

Nobuaki Nawa / Tomotsugu Mizoguchi

1. 背景 米国最大インテリア見本市 NeoCon

NeoCon は 1969 年より毎年 6 月に米国シカゴのマーチャンドイズマートで開催されているインテリアデザイン業界最大の展示会のひとつである。(図 1) 家具や壁紙、カーテンなどの布地、フローリング素材やカーペット、そして照明器具やドアの把手などの金属器具に至るまで、インテリアに関わる最新の製品、またはサービスやテクノロジーなど 500 社以上の企業が提案し、オフィスのトレンドにも大きな影響を与える。また、世界中から何万人ものインテリアデザイナー、建築家、工業デザイナー、テキスタイルデザイナー、製造業者など訪れるため、関係者同士の交流や学びの場としても非常に価値のある場と言える。



図 1 マーチャンドイズマート

本稿では、2017 年の報告を振り返りながら最新の「ラウンジワーク空間」の変化と最新の動向について考察した。

2. ラウンジワーク空間の提案

人の活動が知識創造へ移行するとともに、オフィスは「組織を配置する空間」から「機能を配置する空間」へと多様性が求められ、その際、集中／協働／交流など「3 つの行動モード」を支える環境が必要となる。そして、ワーカーには「適業適所」型のワークスタイルへの変革が求められる。日本オフィス学会国際動向研究部会¹では、集中／協働／交流の空間選択肢を提供するために、カフェテリアやミーティングエリア、リフレッシュエリアなどの共用空間に対して、ラウンジ型空間の設計言語を活用した作業空間「ラウンジワーク空間」への機能更新を提案している。(図 2)



図 2 ラウンジワーク空間のセッティングイメージ

ラウンジワーク空間はオープンで境界が曖昧な共有エリアだが、「3 つの行動モード」に応じて異なるセッティングに分類することができる。

- イ) 集中系セッティングは事務作業（デスクワーク）や熟考を要する個人作業（フォーカス）向きの場。
- ロ) 協働系セッティングは情報伝達（ミーティング）と創造共同作業（コラボレーション）を支える場。
- ハ) 交流系セッティングは偶発的交流（インフォーマルコミュニケーション）を促す場。

また、「適業適所」型のワークスタイルの定着は、自律的行動を推奨する「ルール」と「カルチャー」が求められ、継続的なチェンジマネジメントが必要である。

3. 考察 NeoCon にみる「ラウンジワーク空間」の提案

2013 年の HermanMiller 「Living Office」の発表から 5 年

¹ 2015 年度にて解散・終了

目、2017年のNeoConでは「ラウンジワーク空間」の提案がほぼ定番化していた。(図3)特筆すべき提案として、ラウンジ型空間の設計において、多様な家具アイテムを一つのスペースにまとめる手法として「ラグ」がフォーカスされていた。またラウンジ型空間の設計言語におけるオフィス家具は、質感や仕立ておよび心地よさが重要な要素であり、機能で争う時代から一歩先に進んでいると言える。



図3 2017年NeoCon HermanMiller「Living Office」

近年のモバイルツールとデータ通信インフラの進展は、テレワークの推進を助け、ワーカーへ働く場所の選択肢を拡大させた。他方で企業では、企業に対するエンゲージメントの低下、生産性の低下の懸念を理由としてワーカーをオフィスに戻そうとする傾向もある。そのため、よりリラックスできるホームテイストをオフィスに取り入れた、ワーカーが快適に働ける空間づくりが定着しつつある。2017年のNeoCon報告では米国企業におけるこのトレンドは「フリーランサー」の増加する社会背景が強く後押ししていると考察されており、ソファなど「ラウンジワーク空間」における交流系セッティングがフォーカスされていた。

一方、今回のNeoConでは協働系、集中系セッティングがフォーカスされていたと言えよう。今年のNeoConキーワードは、コラボレーション、フレキシビリティ、アジリティ(機敏性)そしてオープンオフィスの中でのプライバシーの確保が挙げられる。

オープンオフィスは、オフィスの効率化によるコスト削減あるいは開放的でコミュニケーションの活性化をもたらすと考えられる理由からオフィスの主流となってきた。しかしながら一方では雑音による生産性の低下や、電話や会議に必要なプライバシーの欠如を引き起こすことから最近では敬遠される傾向もある。オープンオフィスではメリット、デメリットを踏まえた上で、プライバシーとバランスの取れたワークスペースが必要である。

そこで注目を浴びたプロダクトがフーンブースである。今回のNeoConでは、このフーンブースあるいは防音ブースが非常に多くのショールームで見られた。以前はショールームの隅にひっそりと展示されていたものが、今回はショールームの入口正面あるいは中心に展示されており注目の高さがあることがわかった。常設展示場だけでなく、7階の期間展示エリアでも10数社のメーカーが出展しにぎわいを見せていた。

(図4)一人用から複数人用まで大小様々なタイプが展示されており、これらのユニットの多くは、天井には空調用のファン、またコンセントと照明付きの小さなカウンターなど、個別の作業スペースを持つようにデザインされている。



図4 7階エリアのフーンブース

Frameryの防音ブース、『Framery 2Q』はBest of NeoConの「音響プライバシー&モジュラーソリューション部門」でシルバー賞を受賞したことで非常に際立っていた。(図5)カ



図5 Framery社の「Framery 2Q」

ラフなフレームと丸みを帯びた形状が柔らかく暖かい印象を与え個性的であった。フーンブースからカンファレンスルームまで、これらのモジュラーシステムは、オープンオフィスの中でフレキシブルなプライバシーを提供する。

Best of Competition はOFSの『Obeya』が受賞した。Obeyaは開放的なスキャンジナビアンデザインの木製フレームワークである。(図6)用途やニーズに合わせてフレキシブルな組み合わせが可能で、木の自然の美しさを利用してプライバシーとコラボレーションのための居心地の良い空間をつくることのできる。今回のNeoConも2017年と同様に木製家具が主役であることに変わりはない。



図6 Best of Competitionを受賞したOFS『Obeya』

OFSはさらに『LeanTo』でBest of NeoCon「音響プライバシー&モジュラーソリューション部門」のゴールド賞を受賞した。(図7)四方をパネルで囲った囲い込み系ソファはたくさんあるが、LeanToは頭上もパネルで覆われたより防音性の高いベンチソファである。特にオープンオフィスの中でのプライバシーの確保に役立ち、集中やリラックス、コラボレーションのためのスペースを提供する。



図7 OFS『LeanTo』

今回、特筆すべき製品のひとつとしてカーテンが挙げられる。BuzziSpaceはスチールのフレームとカーテンを組み合わせ

た『BuzziBracks』を発表した。(図8)間仕切りとしてそのまま使用できるほか、専用のテーブルや棚、ソファ、コートハンガー、ピンナップボードなどのアクセサリとセットする機能的なプラグインシステムとしても使用できる。カーテンは軽量であるため、会議や電話、集中、コラボレーションなどに必要な空間を開閉により容易につくることができ、また吸音効果もあるため視覚と聴覚の両面からプライバシーの確保ができる。



図8 BuzziSpace『BuzziBracks』

仕事の重心が知識創造へ移行し、コラボレーションのニーズが高まるにつれて協働系支援家具も年々進化を見せている。Stylexの『Free Address』はGenslerのプロダクトグループが開発に携わり、テーブルやベンチソファ、ストレージを



図9 Stylex『Free Address』

組み合わせることで、ソロワークやミーティング、ラウンジとしての機能を同一のスペースで可能にする、まさに「ラウンジワーク空間」に特化した家具と言える。(図9) 多様でフレキシブルなワークセッティングは多様な活動を可能にし、また異なる思考とコミュニケーションを誘発する。

そして今回特に際立って見えた協働系支援家具は、Steelcase が発表した『Steelcase Flex Collection』であった。(図10) Steelcase Flex Collection は、Best of NeoCon の



図10 Steelcase 『Steelcase Flex Collection』

「コラボレーションのための家具コレクション」部門でゴールド賞を受賞した。これらの製品は、一日を通して目まぐるしく活動から活動へと移行するハイパーコラボレーションを必要とするチームに向けて開発された。スペースを素早く変更できるキャスター付きのテーブル、部屋から部屋に移動できるモバイルディスプレイ、どこでも使えるホワイトボードなど柔軟性と機敏性を持ったアイテムにより、急変する活動に合わせて、チームは作業の流れを妨げることなく、ほんの数分で最適なワークスペースを再構築することが可能となる。

また Steelcase は Anker と共同開発した『Flex Mobile Power』を発表した。(図11) これは持ち運びできるモバイルバッテリーである。会議の途中でノート PC の充電のために



図11 Steelcase 『Flex Mobile Power』

コンセントを探すといった煩わしさから解放され、どこでも働きたい場所にフレキシブルに電力を供給できる。

今回はワイヤレス充電アイテムあるいはワイヤレス充電器内蔵の天板を使用したデスクの展示も増えていた。(図12)



図12 INNOVANT のワイヤレス充電器内蔵のデスク

4. 最後に

2017年のNeoConの交流系セッティングから、今年は集中系、協働系セッティングへと中心が移り変わっていた。これはワークスタイルや仕事の中身自体の変化を受け、オフィスのニーズや課題が変化してきたことによるものであろう。そのため、多くの家具や製品はオープンオフィスの中で、柔軟性と機敏性を提供するようにデザインされている。家具やテクノロジーは、オープンオフィスの中でのプライバシーの確保、あるいはオフィス内のあらゆる場所で働くという新しいニーズを満たすように適応しなければならない。モバイルバッテリーやワイヤレス充電の進展は、ますます働く場所の制約をなくし「ラウンジワーク」を促進させていく。オフィス家具研究部会でも新たな時代におけるオフィス家具のあり方の提案を考えていきたい。

ところで、NeoConと同じ時期に、昨年まで11階にショールームを構えていたKnollはマーチャングイズマートにほど近いフルトンマーケットでショーを開催した。また、HermanMillerは、今回のショーで51年占有した3階エリアを開放すると宣言した。昨年50周年という節目を迎えたNeoConもオフィス同様、新たな方向性に向かうことが予想される。

参考文献

岸本章弘「適業適所型オフィスのための『ラウンジワーク空間』の提案」日本オフィス学会第16回大会予稿集2015年9月
溝口寛二「NeoConにみるオフィス家具の提案に関する報告」日本オフィス学会第16回大会予稿集2017年9月